

湯の街別府からの発信  
大分県別府市 稲尾 聡文

### 1. 秘話「稲尾さん、新ちゃんよべんかなあ」

「もしもし、稲尾さん？これから出てくれる？」時間は8時頃だったような・・・。呼び出し相手は「ふるさとを結ぶHP」の管理人のK I Y Oさん。「びっくりするかしれんけど、お客さんなんや。誰と思う？」「・・・」「新ちゃんが今別府におるんや。」「ええっ・・・」

その30分後にはきょうこさんもそのテーブルにいた。聞くとところによるとぶらり旅の途中、12月の同じく大分県の朝地町というところの人権コンサートの下見をしてきた帰り、ちょっと別府へとのこと。10月の中旬だったと思います。

2002年のことです。3月の「共に歩む会」の総会以降、職場でハンセン病の問題をどう子どもたちに投げかけるか模索していた頃、新ちゃん登場。7月の大分での「生き直しコンサート」に出かけて以降「アリとゾウ」の紙芝居に取り組んだきょうこさんつながりで私と新ちゃんのご対面。話も盛り上がり10時頃校長に電話、「明日宮里さんとの交流をやりませうが・・・。」そんな時間にも関わらず事情を知った校長は快諾。

翌日、きょうこさんのクラスの子どもと新ちゃんの交流が実現。(私は当時担任外教師)「アリとゾウ」のモデルになった「ありんちゃん」ということで2年生の子どもたちは大喜び。給食も一緒に食べました。この出来事が実はその後の別府での取り組みのスタートになるなんて、まだ誰も気づいてはいませんでした。

その時の会話で私は非常に大きなショックを受けました。宮里さんはその日の給食が初めての体験だったというのです。彼は私と同世代です。同じ時代に生きていながら私は全く知らない世界で彼は生きてきた・・・。私はその時すでに教職について20年が過ぎており、教職員組合の一員というか1000人近い支部の責任者という立場にあり、少なくとも「憲法・教育基本法」のもと、民主主義の追求を自分の課題にできていました。「初めての給食だ。」という一言は重くのしかかりました。そしてK I Y Oさんの一言、「稲尾さん、教職員組合何かで新ちゃんよべんの？」

自分にできることは何か？何をしなければならぬのか？そしてチャンス待ちました。

### 2. チャンス！

私の所属する教職員組合では夏休みに組合員と保護者や一般市民を対象に教育講演会を各地で開催していました。2003年、私の支部では2カ所開催。徳田靖之弁護士と熊本菊池恵楓園の阿部智子さんを講師として開催。平行して、市の人権啓発講演会に「宮里新一」を売り込み。たまたま担当者が労働運動の中でハンセン病の問題に出会っていた方で、偶然も重なり「実現！」

この時は労働金庫での「アリとゾウ」展示会。児童養護施設での「新ちゃんライブ」そして、新ちゃんの宿泊している「豊泉荘」でのロビーコンサート(この時は写真家の八重樫さんがわざわざ見えてくれて朝日新聞の全国版に出ました。)そして、私の行きつけのお店でもライブ。

### 3. 新ちゃんの一言

そうそう、その時「市長訪問」なるものも企画しました。新ちゃんが一言「いやー、療養所もないところなのに市をあげての取り組み、すばらしいですね。全国各地もこの別府市のような取り組みが広がればいいのですが・・・。」この一言が教職員組合出身の革新市長の胸を打ちました。市長は県議時代に熊本の国賠訴訟の傍聴にも出かけたことがあったそうで、「宮里さん、是非毎年この別府であなたの歌声を響かせてください。」ということから、実行委員会誕生につながりました。

### 4. 実行委員会結成

2003年8月の人権啓発コンサートは台風のおかげで(?)3週間の延期を余儀なくされました。つまり宣伝も3週間余分にできた。通常そういう場合は「中止」と言うことになるのだが、市長の要請「何とか延期してでも開催できないか。」もありこのころから、私たちはただでは転ばないと言う体質を少しづつ身につけていたのかもかもしれません。

そのコンサート終了を受け、早速来年はどうしようかということになり、「是非市民を巻き込んだ実行委員会形式でやってくれないだろうか？」と下駄を預けられ、担当の方と「思う存分やろう」と言うことで2004年3月の実行委員会立ち上げまで「なんのために」「何を」「どんな形で」・・・と準備が始まりました。その第1回目の実行委員会の様子は地元紙に次のように紹介されました。

「いまだ、ふるさとに足を踏み入れることをためらうハンセン病回復者。交流を通じて差別の厚い壁を知った支援者たち。回復者を暖かく迎え入れる土壌をつくろうと、支援者と別府市が5月、同市で人権コンサートを開く。「お帰りなさい」という声が、県民一人ひとりの思いになることを願っての企画。このコンサートを出発点に、差別解消に向けた運動の輪をさらに広げていきたい考えだ。」

### 5. 2004年5月

この時は方向性がしっかりするまで週1回のペースで実行委員会や企画委員会を開催していました。4月の3回目の実行委員会には市長がわざわざやってきて激励、宮里さんも駆けつけてきて歌を披露。このころ「5月の街」が完成したのではなかったかなあ。そして、この人権コンサートを挟んで3つの取り組みを提起。一つはパネル展の開催。「ふるさとを結ぶHP」主宰のKさんたちの所有のパネルで、質量ともに圧巻です。二つ目は「風の舞い」の試写会の開催。映画上映会ではなく試写会としたのは、是非この試写会をきっかけにいろんなところで上映会を開催してくださいというメッセージを込めようと言うことでした。結果としてはビデオが数本売れました。三つ目はこれが目玉になればという気持ちを込めて「学校交流訪問」宮里さんには大変ハードなお願いをしたわけですが、コンサート一週間前に別府に来てもらい、いろんな学校現場に交流で入ってもらい「交流・啓発」活動を広げたいと考えたわけでした。

「大切さはわかるけど、何をしたらいいかわからない・・・。」という教育現場の仲間を声をよく耳にします。これはハンセン病の問題だけでなく様々な課題についても同様です。彼らを批判するのは簡単ですが、それでは現実的に実践は広がらないというわけできっかけづくりをしようと思ったのです。

実行委員会のメンバーは総務部、組織部、宣伝部・・・と別れ、それぞれが自分のテリトリーに全力で進もうとしましたが、かなり混乱がありました。それでも、「コンサート」「パネル展」「試写会」「学校交流」と取り組む方向がはっきりしてしまっていたので「わいわい」いながら何とか本番にこぎ着けたような気がします。マスコミの方々の力もフル活用でした。地元紙、地元ケーブルテレビ、地元放送局・・・この時期、結構「ハンセン病」という言葉が出回りました。「知ってほしい」「気づいてほしい」「考えてほしい」こんな実行委員の思いがいろんな知恵となり、一つの動きになったような気がします。コンサートのテーマは『新ちゃんinべっぴん「お帰りなさい」コンサート～湯の街別府を第二のふるさとに～』というものでした。

### 6. 2005年7月

この年は前年の経験をもとに、そしてその経験がやや「油断」にもなりながら7月というやや時期を下げての開催となりました。柱はやはりコンサートプラス3つ。「パネル展」「映画上映」「学校交流」。「映画」は中山監督をお招きして「あつい壁」でした。そして、やはり一番力を入れた「学校訪問」は・・・。いろんな場(例えば「人権教育担当者会議」「組合会議」)で「交流」しませんかとお誘いをしましたが、これがなかなか・・・。悲しいほどに反応がありませんでした。結局、実行委員の関係する学校のみ・・・。ただこの年は市内の短期大学の学生に授業の一環として講座を組んでもらうことができました。本番の人権コンサートは「湯の街別府を第二のふるさとへ」というテーマでシンポジウムもやりました。熊本菊池恵楓園の自治会長になった工藤さん(本県出身)、徳田弁護士、地元ホテル旅館組合の事務局長さん、というメンバーのパネルディスカッション。コーディネーターは私がつとめました。

そして、悲劇(?)は夜の懇親会。市の担当課長から「2年間やってきたので行政は実行委員会から引き上げます。」との通告。「あーあ、彼らは仕事としてやってきてたんだなあ。」という現実をしっかり見せていただきました。それとともに、「えっ、じゃあ来年は予算0からスタートだあ・・・。」

### 7. 2006年6月

何をさしおいても「予算」をどうするか・・・。金の話など「よさんか」と(一人笑い)言われることを覚悟で対策。やはりここでも「転んでも・・・」の世界。九州労働金庫の支援事業に取り組みが認められ「〇〇円」確保。1月から予算の見通しのない中から企画委員会を開いた努力が報われました。

紙面の関係上かなり省いて報告になりますが、今年度はコンサートと学習会開催、市長面談、菊池恵楓園訪問・・・と計画を立ててきましたが、現在『マイペンライ「お帰りなさい」ふるさとトーク&ライブ』のみ開催。高校生がステージで4名、メッセージを読み上げました。自分とハンセン病のかかわりを素直な気持ちで訴えてくれました。そして、恵楓園の阿部智子さんと徳田弁護士のトーク。会場には意外と年輩の方々が多く阿部さんの話と同世代として感じるが多かったのでしょうか、涙する人がたくさんいました。さらに、地元のストリートミュージシャンの浦田さん、そして宮里新一さん。「お帰りなさいーい」とかけ声が飛び「ただいまーい」と新ちゃんが答える、ほのぼのとした雰囲気がとても良かったです。尚、リズムを合わせることに自信をなくした稲尾は今年ギターを手にすることはありませんでした。(誰も期待してないか・・・。)

### 8. 最後に

これまで4年間、ささやかではあるが「大切な問題ではあると思うけど、どう取り組んだらいいかわからない。」という学校現場の仲間の声(直接に言われてるわけではありませんが、そういう感じで取り組みに入れていない仲間を見ながら)に対して、きっかけづくりをしていこうということが、この取り組みの大きなねらいでもありました。

以前、徳田弁護士が「戦後この現憲法下において熾烈を極めた無らい県運動の中で、多くの子どもが学校での身体検査の中で教師の手によって通報され、そして療養所に送り込まれた。

そして、私の知るところではただの一人の教師も療養所を訪ねた人はいない。」という話をされたことがありました。私は、日本教職員組合の一員として「教え子を再び戦場に送るな」というスローガンをとても大切なものとしてきました。しかし、この話を聞いたとき、何かこのスローガンとだぶって「ハンセン病問題」を考えなければいけないなあと思いました。

市民運動として、市民への投げかけの形を取りながら、一方学校現場へのメッセージをこの取り組みを通して発信できたらいいなあと考えています。ハンセン病の問題は私たちのこの社会が、まだまだ本当の意味での民主主義を実現できていないんだということ、そして一人ひとりの小さくてもいい、ささやかでもいい、具体的な「行動」によってしか「民主主義の実現」はできていかないんだということ。

教育部会に参加し、改めて自分たちの取り組みを振り返る機会を持つことができ、そして全国各地の仲間とのつながりを強く感じることができました。

---

[←戻る](#) [TOP](#) [市民学会TOP](#) [進む→](#)